

# 歴史探訪

## クラブ

其の 215

History Inquiry Club



文化財課 ☎22-1720  
(博物館) FAX 22-2028

### 豊橋と田原を結ぶ天津繩手 冬の寒さと闇の「わさ」と

現在、国道259号は豊橋と田原を結ぶ重要な街道となっていますが、これにあたる道は既に江戸時代であり、古い地図では「田原みち」といった名称で書かれています。このうち、現在の豊橋市杉山町天津から田原市谷熊町までの4kmほどを「天津繩手」と呼び、当時は水田の中を真っすぐに細い道が続いていました。水田の北側は三河湾が広がっているため、冬には北

西からの強い風がさえぎることなく道を通る人たちに吹き付けました。



この天津繩手に吹く風を俳句に残したのが、松尾芭蕉です。芭蕉は1687(貞享4)年の冬、当時保美町に住んでいた弟子の杜国に会うために天津繩手を通過していたところ、馬上で遠慮ない冬の風に見舞われました。芭蕉はさぞかしつらかったのか「冬の日や 馬上に氷る 影法師」の句を残しました(『笈の小文』)。この芭蕉の気持ちは、毎日自転車通勤する中学生、高校生の皆さんならわかるかと思えます。

夜になると

この道は暗闇で包まれます。時代は下り、1841(天保12)年の現在の暦で3月初め、田



▲豊橋市天津地区の旧田原みち

原の城下町に住む善九郎という駕籠かきが、吉田の町(豊橋)からの帰り道、一人で天津繩手を歩いていました。まだまだ寒い時期の午前2時ごろで、手には提灯を持っていましたが、この日の月は既に西に沈み、遠くの人家の灯も消えているため、あたりは真っ暗です。

善九郎が天津繩手の半ばを通過したところ、三河湾の向こうの、現在の浦町のあたりに明かりが見えたと思ふと、火の玉となって海を超えて善九郎に迫り、後ろから彼を抱えて空に持ち上げました。善九郎が気づくと、彼は川の中に胸まで浸かっている、数百の火の玉が彼の前後左右を取り囲んでいました。善九郎は恐怖の中、なんとか元の道に這い上がり、豊島町の民家に



▲龍泉寺(田原町)にある、芭蕉が残した俳句を記念した句碑

駆け込んで助かりました。なお、この火の玉は、「グヒンサマ」という妖怪だったとのことでした。

妖怪話になってしまいました。夢のないことをいえば、この出来事自体が暗闇と寒さ、そして孤独から生み出されたものでしょう。ちなみに、この話を人から聞いて書き記したのは、当時田原で塾居中だった渡辺華山です。

現在、多くの人は、国道259号を車で行き交い、移動中に風や寒さを感じることはなくなりました。夜には車はライトを灯し、外には街灯があるため暗闇も少なくなり、便利な暮らしになりました。しかしその分、自分を取り巻く世界を自分自身の肌で感じる機会が少なくなり、その点においては少し寂しさを感じることもあります。(学芸員 木村洋介)